美術品保管　大阪府ずさん

「維新政治」がはびこる大阪府・大阪市は、夢洲万博やIRカジノ誘致だけでなく、医療や福祉、教育・文化にも暗い影を落としている。毎日新聞25日朝刊社会面の表題記事には、驚きとともに怒りがわいてきた。抜粋して紹介する。

大阪府所蔵の現代美術作品105点が、府咲洲庁舎（大阪市住之江区）の地下駐車場で保管されていることがわかった。いずれも彫刻で評価額は計2億円を超える。保管場所には誰でも出入りができ、梱包されずビニールシートで覆っただけのものもある。劣化と盗難のおそれがあり、関係者からは「粗大ゴミと同様の扱いだ」と憤りの声が上がる。府は苦肉の策だとするが、問題の背景には、作品が時代の変化や行政の施策に翻弄された経緯があった。

駐車場に置かれているのは「大阪府20世紀美術コレクション」（約7900点、評価額計約46億円）の一部。府によると、彫刻作品105点の評価額は計約2億2000万円になる。

そのうち、関西の抽象彫刻をリードした森口宏一（1930〜2011年）の作品が約60点を占める。代表作「景の仕組」シリーズなど、鉄やステンレス製で大型の作品が多く、最大一辺約8㍍のものもある。この他、府が90〜01年に開催した国際コンクール「大阪トリエンナーレ」の受賞作で、海外作家の作品も多く置いているという。

直接的なきっかけは、府による行財政改革だ。府文化課によると、作品を地下駐車場に置くようになったのは17年。咲洲庁舎低層階の事務室内で保管していたが、ビルへ民間施設の入居を進めることになり、事務室を明け渡すように求められた。庁舎内で保管に使える場所を探したが、地下駐車場しかなかったという。

美術品は通常、温湿度が一定に保たれた収蔵庫に入れる必要がある。同課は鉄素材のものなど温湿度の変化に影響を受けにくい作品ばかりだと説明する。地下駐車場は雨や直射日光は避けられるが、作品の真上を走る配管から水漏れが発生したこともある。さらに、近くは海でサビの懸念もある。

森口宏一の長女で美術評論家の森口まどかさんは「粗大ゴミ同様の扱いだ」と憤る。府が所有する森口の彫刻作品約100点（評価額計約2億3000万円）の6割が地下駐車場に置かれている。

昨年、作品の確認のため現地を訪れたまどかさんは配管の水漏れを発見。府に報告し補修されたというが、「これまでにも水漏れが起きていたとしても不思議ではない」と話す。さらに、粘着テープがじかに貼られた作品もあったといい「作品へのリスペクトが全く感じられない。いくら予算がないといっても、作品保全のための努力がなされているとは思えなかった」と訴える。

（2023年7月26日）